

文学博士佐伯 富君の『中国塩政史の研究』に対する

授賞審査要旨

本書は古代から清代までの塩政の制度とその沿革を論じたもので、第一章「緒論」、第二章「塩と中国古代文明」、第三章「中世における塩政」、第四章「近世における塩政」、第五章「結論」に分かれている。この中で史料の豊富な第四章の叙述は特に詳細で、全巻の約八割を占めている。

塩は一日も民生に欠かすことのできないもので、中国では塩の問題が国家の存亡に大きな関係を持っていた。塩は中国では生産地が比較的に限られ、これを広大な地域に配分しなければならなかったため、そこに複雑な制度が生まれた。著者は「緒論」で塩が広く世界歴史発展の上で重要な意味を持っていたことを指摘しておいて、第二章で古代の伝説時代から漢代までを取り扱い、この時代には山西省の解州の塩池が最も重要な生産地で、堯舜の伝説時代から殷・周へ、更に春秋・戦国への政治権力の移動が、解州塩の掌握をめぐって行われ、秦の天下統一もこの塩池の占領がきっかけとなったらしいことを述べ、前漢の武帝の時代になって軍事費の膨張などのために、後に塩政の中心問題となる専売制が誕生し(B. C. 119)、それが後漢時代にかけて変遷して行った過程を説明している。

第三章では、中世として三国以降唐代までを取り扱っている。中国が分裂していた三国・晋・南朝・北朝に於ては塩税が財源として重要視されはしたものの、専売制は長続きせず、天下統一を完成した唐の時代になって塩の国家的

統制が再び行われるようになり、それが更に安史の大乱を契機に多額の軍事費を必要とするに至って、肅宗の乾元元年（A.D. 758）に専売制度を全国に実施した経過を述べている。この時から清末に至る一一五五年の長期にわたって塩の専売が続いたのである。塩利は時には財政収入の半ばにまでも達した程であるが、著者は、専売になって塩の価格が著しく高くなると、私塩密売者が多数出現し、彼等が秘密結社を結成して武器を携帯し、団体を組んで密売を強行したこと、官ではこれを取り締るために厳重な罰則や手續を制定したが、塩を販売するのにはどうしても商人の力に頼らなければならないので塩商が抬頭し、彼等が高官や軍閥と癒着して塩利を手中に収め、塩政を崩壊に導いて国家の財政基盤を危うくしたこと、近世に多くみられる塩の密売集団を温床とする反乱が唐代に既に現れていること、などを論じている。そして唐代の中頃以降、江南の開発が進捗すると共に、淮水下流域方面の塩場の発展したことが注目されている。

第四章は五節に分かれており、それぞれ（一）五代、（二）宋代、（三）元代、（四）明代、（五）清代の塩政を取り扱っている。五代の政權軍閥は塩利を重要な財源としており、この時代の塩政は中国史上最も厳しいものであった。宋代以後の塩政は大体唐代の塩政を踏襲したもので、宋代に整備されてそれが更に発展したと言ってよい。宋代の塩政には権塩法と通商法があつて、はじめは政府が塩の販売を行う前者が実行されたが、後には販売を商人に委任する後者に移行した。宋代には北方から異民族の侵寇があいつぎ、軍事費の膨張を塩利で補うために専売収入が次第に増額され、国家収入の半ばを占めるに至つたが、こうした状況は清末まで続いた。また宋代の塩政として注目すべきものに行塩地（販売区域）の決定と入中法の制定がある。それぞれの生産地の塩の販売区域を設ける政策は五代にも行われたが、宋代に

その区域が確定し、それが元・明・清と続いて受け継がれていった。入中法は商人をして糧秣を北辺に納入させ、その代価として商人に塩引（塩の手形）を交付し、商人はこれを持って生産地に行き、塩を受けとって指定された行塩地に塩を運搬販売するものである。塩価の高騰で私塩の密売が盛んになり、密売者の集団が反乱を起こしている。元代では国家財政の塩税に依存する度合が大きく、世祖の時代には財政収入の八割が塩税であったこともあり、私塩に対する罰則を強化したが、それには背後に密売の増大があったものと考えられる。

明は宋と同様に北辺からの異民族の侵寇に苦しみ、宋の入中法にならって、塩商に軍糧を北辺に運搬させる方法をとって、これを開中法と呼んだ。山西はシルクロードの延長線と、ウランバートルから南下して太原・開封を経て広東に通じる南北縦貫道とが交差する要衝に位しているので、山西商人は内外の貿易に従事し、各王朝と結びついて政商として活躍したが、明・清の王朝とは特に密接な関係にあった。宋代以後には、解州塩に代わって淮水下流の海塩が重要な役割を果すことになり、明末から清初にかけてその産地に近い揚州が塩の集散地となつて、天下の塩商がここに集まったが、この塩商としては徽州（新安）の出身者と並んで山西商人が活躍した。塩商は塩を売る時は銅銭を受け取り、塩税は銀に両替して納入したから、外国から銀の輸入が増大して揚州・蘇州地方に流入してくると、銀の比価が下落して塩商は莫大な利益を得た。揚州の塩商の中には、その富一千万兩と称される者もあり、彼等は清朝の財政に大きな寄与をしたのみならず、学問・芸術のパトロンとして清朝文運の隆盛に貢献した。しかしアヘン戦争の後から揚州が急激に衰微し、清朝は国家財政の支柱を失って没落の一途を辿った。揚州の衰退は、銀が海外に流出して塩商が大損害を受けたことが大きな原因であった。

著者は右に述べた諸問題その他を、綿密詳細に論述しており、特に清朝においてそれが詳しい。そして中国諸王朝の権力の掌握と消長が塩政と密接な関係にあることを解明し、また専売制が唐代以降長く続いたことと、その間君主の独裁政治が継続したことを併せ示して、両者の関係を指摘している。政府の専売制が行われるところに闇ルートが開けることは、中国の塩専売においても例外でないが、著者の考察はこのような裏面にも及び、秘密結社の取り扱ふ塩が莫大な量にのぼり、これらの秘密結社による叛乱が度々起こったことについて述べている。更にまた本書（本文八〇七頁）には巻末に一〇五頁に及ぶ詳細な索引が付けられているが、これは本文の叙述と相まって、専門用語を理解するための手引きとすることができる。

本書は五十年にわたる著者の研究の成果をまとめたもので、歴大な史料を用いて克明な検討を行った画期的な業績である。中国史における塩政の問題を部分的に研究した論文は少なくないけれども、本書のように古代から清末までを通史的に総括し、主としてそれが国家社会に及ぼした影響を重視する立場から塩政の変遷を系統的にまとめた著書はこれまでになかった。中国の塩政については、更に検討すべき問題——例えば金代の塩政その他——が残されており、また本書に補正すべき点は存在するものの、著者が本書で清朝までを含めて、この著しく複雑で敬遠されてきた総括の難事業を打開し、中国史理解の一つの視角を推進させた功績は大きい。